

# 京都府青少年育成協会会長奨励賞

## 「音での繋がり」

舞鶴市立城北中学校 3年

福田陽生

慣れない黒いスーツ・蝶ネクタイを身に着け、僕は一人の奏者として、舞台に立ちました。

現在、中学校の吹奏楽部で打楽器を担当している僕は、今年の四月、縁あって一般の吹奏楽団の定期演奏会に団友として出演しました。

本番一週間前の練習の事でした。ある曲の中盤に、盛り上げる部分がありました。僕はとりあえず「こんなものだろう」という感覚でたたいてみました。

「そこ、もっと出していいところやで。」

と指揮者からの指示が入りました。その時は、指示に応えようと、丁度いい音量で出るように自分なりに微調整してみました。しかし指揮者の反応は「いまいち」…。何回かやり直すうちに、僕は、遠慮と不安で大きな音が出せなくなってしまいました。すると、

「なあ。一回怒られてもいいからさ。思い切って自分が思う音を出してみな。怖がらんと。」

一人の団員さんが、言われました。何も言い返せなかったけれど、その言葉で、自信が湧き上がってきました。

「それじゃあ、自分の思うようにたたいてみて、後は周りの団員さんたちに任せよう。」

指揮者が最後に一回というので、自分では出したことのないくらいの音で楽器をたたいてみました。すると、指揮者もその団員さんも「うん」と大きくなずき

「自分の楽器の音は、遠慮せず、出すところは出さないと。そこは、自信をもっていいよ。」

と言ってくれました。

吹奏楽では、自分と同じ打楽器を担当している人はいません。つまり、僕の出す音が、全体の演奏の出来を左右するといっても過言ではありません。この時、僕は、自分がこの団体で中学生としてではなく、一人の社会人として、奏者としての責任があるという事を実感しました。部活ではないので、音楽歴が長い人や現役のプロ演奏者、久しぶりに楽器を始めた人など、個人で違う音楽表現が出てきます。音楽としてのルールを守ってはいても、その人なりの演奏の仕方が必ず見えてきます。それを一つの曲として指揮者がまとめていくのです。

今回大人の人と一緒に演奏してみて「いい曲にするために自分はどうするのか。」という意識が大切だと実感しました。僕が練習に参加させてもらう前は、

「やっぱり大人は、僕らよりも、上手いな。すごいな。」

としか思っていなかったけれど、一人の「人」として、「演奏者」として責任を果たすことが周りとの良い関係を築いているのだと気づきました。

僕は、吹奏楽に出会うまでは、何かに夢中になることなんてありませんでした。どちらかというと、自分の思いよりも、周りの雰囲気や友達の思いを優先して、波風が立たないようにふるまうことが多かったように思います。そんな僕が、この経験をとおして、自分らしさを求めて表現できるようになりました。

この団体だからこそできる、人間関係は僕の一生の財産です。今やスマホの「ライン」やSNSでたくさんの人と繋がり、会うことが可能になりました。しかし、それは表面上の付き合いだけであり本当の人間関係ではないと考えます。画面上の文字を使ってやり取りすると、自分らしさというものを表現できない部分があると思います。決して使うことを否定はしません。しかし僕は、音楽、つまり「音」を使って表現することの素晴らしさを知っています。その音は録音ではない、生のその人らしさが出ている音です。

人は、誰かと繋がることで自分の価値観や考え方を变える事ができます。

僕は、自分の目で耳でそして「音」で人と繋がり、よりよい人間関係を築いていきたいと思っています。